

グローバルな感覚を育む機会の創出に向けたアドバイザーボード(第1回)議事録
2月16日(月)16時30分から18時00分まで

(田中室長)

ただ今よりグローバルな感覚を育む機会の創出に向けたアドバイザーボードの第1回会議を開会させていただきます。東京都子供政策連携室長の田中です。

本日はご多用の中、ご参加いただき誠にありがとうございます。座長が選任されるまでの間、進行役を務めさせていただきます。初めに知事より挨拶申し上げます。

(小池都知事)

皆さん、こんにちは。本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

非常に長いタイトルで、多分そのうち4文字ぐらいに縮まるんじゃないかと思えますけれども、でも一つ一つ重要な項目が入っておりますので、グロー感、グローバルな感覚ということで、皆様方にはこのタイトルが示すとおり、グローバルな環境で力を発揮できる国際人をいかに育てていくかという、昔からあるテーマですけれども、今まさにその喫緊の課題になっているかと、そのように思います。

そして、教育はですね、最も有効な、かつ長い投資であります。次代、次の世代を担う子供たちが可能性を花開かせて、また将来、世界で活躍できるように、ちっちゃな子供の頃も含めて、できるだけ早い時代から、この日本や世界の文化に親しむ、そして豊かな国際感覚をも育む機会を創出したいと考えております。こうした思いのもとで、子供政策の新たなリーディングプロジェクトにグローバルな感覚を育む機会の創出を位置付けたところでございます。

それぞれ成長や発達の段階に応じて、どのような取り組みが求められるのか、ずっと議論されているのは、例えば英語はいつの頃から学んだ方がいいのか。いやいや、日本語がダメになるからそれじゃダメ、思考が混乱するんだとか、ずっと議論が続いているわけですけれども、じゃあ何が一番好ましい、望ましいのか、これらについて皆様方のご意見をいただきたいと思っております。

そして、このアドバイザーボードを結成しまして、本日からスタートという運びでございます。早速、大阪大学大学院の林先生には、そういったことも含めてお話をいただけるということで、どうぞこの後よろしくお願いを申し上げます。

皆様方の専門的な知見、そして経験を踏まえた忌憚のないご意見を賜りたいと存じますので、どうぞよろしくお願いをいたします。ありがとうございます。

(田中室長)

知事ありがとうございました。続きまして、委員の皆様のご紹介に移らせていただきます。

はじめに、本日出席の委員の皆様をご紹介させていただきます。座席の順に説明させていただきます。学習院大学文学部教授、東京大学名誉教授、秋田喜代美委員。

(秋田委員)

よろしく申し上げます。

(田中室長)

上智大学言語教育研究センター教授、センター長、藤田保委員。

(藤田委員)

よろしく申し上げます。

(田中室長)

東京都立大学法人理事国際担当、ウスビ・サコ委員。

(サコ委員)

皆さん、こんにちは。よろしく申し上げます。

(田中室長)

東洋大学福祉社会デザイン学部教授、内田千春委員。

(内田委員)

どうぞよろしくお願いいたします。

(田中室長)

開智国際日本語学校校長、荻野勉委員。

(荻野委員)

よろしくお願いいたします。

(田中室長)

大妻女子大学家政学部教授、柴山真琴委員。

(柴山委員)

どうぞよろしくお願いいたします。

(田中室長)

なお、国際資本市場協会理事の林礼子委員は所用により、参天製薬株式会社基本理念・サステナビリティ本部、基本理念・CSV推進部スペシャリスト、東洋大学国際共生社会研究センター客員研究員のモハメド・オマル・アブディン委員は、体調不良により欠席となります。

委員の皆様のご協力をいただきまして、実りある議論をいただければと存じます。よろしくお願いいたします。

続きまして、会議の座長と副座長の選任についてですが、皆様方には事前にご相談させていただきましたとおり、座長につきましては秋田委員に、副座長につきましては藤田委員にお願いしたいと思っております。

皆様、ご異議はございませんでしょうか。ありがとうございます。

それでは、秋田委員に今後の会議のご進行をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(秋田座長)

ありがとうございます。それでは、今後の進行は私の方で務めさせていただきたいと思っております。

本日のテーマは、「将来の活躍を見据え、育むべきグローバルな素養」についてでございます。

まず、事務局からご説明をお願いいたします。

(山本企画調整部長)

はい、それでは事務局から説明させていただきます。

まず、グローバルな感覚を育む機会の必要性に関連するデータでございます。

近年、世界における日本の国際競争力や人材競争力は低下をしております。次に、日本の若者の海外志向でございますが、諸外国と比べて低いという状況でございます。また、日本人留学者数の推移は1980年代以降、右肩上がり増加していましたが、2004年をピークに、以降、緩やかに減少傾向となっております。直近は新型コロナウイルス感染症の影響が落ち着き、留学者数は回復傾向でございます。これらのデータなども踏まえ、都では子供たちが将来世界を舞台に活躍できるよう、意欲を育み、チャレンジを後押しすることが必要であると考えてございます。

次に関連する都独自の取組について紹介させていただきます。大学生等向けに海外留学の最初の一步をサポートする東京グローバルパスポートにより、2026年夏の留学から支援を開始してまいります。また、高校生向けの海外留学支援制度としまして、次世代リーダー育成道場についても実施をしております。

都では先月公表のこども未来アクションにおきまして、今後、子供たちが将来世界を舞台に活躍する未来を描けるよう、早くから多文化に親しみ、豊かな国際感覚を育む機会を創出することとしております。具体的には、幼児期における取組の方向性等の検討や、小中学生を対象に世界の多様な文化、社会等を体験できるプログラムを実施してまいります。

最後に、今後の取組に向けた論点でございます。本日は、世界を舞台に活躍する上で求められるグローバルな素養とグローバルな素養を育む上で必要な環境・取組について、委員の皆様からご意見を頂戴できればと考えてございます。

事務局からの説明は以上でございます。

(秋田座長)

ご説明ありがとうございます。それでは続きまして、プレゼンターによる発表の方に移りたいと思います。プレゼンテーションをいただいた後に意見交換をさせていただきます。

プレゼンターは大阪大学大学院医学系研究科教授の林克彦様でございます。林様は、雌雄のマウス由来のiPS細胞から卵子を作り、そして子供を誕生させることに成功し、2024年のタイム誌では、世界で最も影響力のある100人に選出されております。

それでは林様、どうぞよろしく願いいたします。

(林プレゼンター)

はい、過分の紹介どうもありがとうございます。私の少ない経験をこの委員会の議論の場に生かしていただければ幸いに思います。

タイトルとしては、私が所属している自然科学分野における国際化の必要性についてと、留学を後押しするストラテジーについて少し説明をさせていただきたいと思います。

本日の内容としましては、簡単に私の取り組んでいる研究の内容と、海外との研究との必要性ということとを述べた後に、若手研究者への留学のススメとその障壁について議論を進めていきたいと思います。

私の研究分野は生殖細胞でありまして、いわゆる精子とか卵子がどうやってできるかということの研究しております。当然、その異常は不妊や次世代の発生異常にもなりますし、さらに我々の研究分野は、不妊治療の研究開発というところにもコミットしてくるということになります。

特に、我々の研究に関しては、この卵母細胞の数というものに非常に興味を持っておりまして、女性の場合は卵母細胞、卵子の元というのは増えませんが、一定の数からどんどん少なくなっていきます。ただ、生まれた頃には200万個ぐらいある卵子の元が、せいぜい500ぐらいしか使われないということで、いわゆる膨大な無駄をしている。この無駄がどのように起こって、そしてこれをコントロールすることができれば、もう少しこの生殖寿命というのを延ばせるのではないかとというのが我々の研究のテーマであります。

特に、我々、少し後でも出てきますけども、研究の対象としましては、その卵子ができる過程を、すべて体外培養系で行うということをしておりまして、その中でつぶさに卵子がどうやってできてくるか、卵子が途中でどうやって異常で死んでしまうかというのを研究しています。この卵子を作るという技術は、ちょっと手前味噌ですけども、我々の研究室しかできないことでありまして、非常に独自の技術であります。これは今日の議論にも少しありますけども、日本人だから多分できたとは思っておりますけども、そういうような独自の技術を開発して、様々な世界的にも有名な雑誌とか、もしくはタイムズとかから表彰をいただきましたし、さらには最近ではTEDトークでその研究内容についてお話をさせていただいたと、そういうような経緯があります。

私の国際経験といいますが、実はそこまで早くありません。ちょうど先ほどの図でありましたけど、国内の留学件数は2004年がピークでありましたけど、私は2005年に30歳ちょっとで、ケンブリッジに留学をしました。その時も博士課程を取っておりましたので、博士研究員ということでケンブリッジの研究室に行きました。ガードン研究所といまして、山中先生とノーベル賞を取ったジョン・ガードンさんが3階にいる研究室で、たまにランチも一緒にしました。私の所属した研究室は様々な国の人が集まってきておりました。もちろん言語は英語ですけども、いろんな価値観のある人間に出会えて、非常に有意義な時間でした。

自分のことを振り返るとですね、留学する際の達成目標、どういうことがそのモチベーションになっていたかといいますが、1番目は、私、研究者ですので、海外での研究生活を体験したいということがありました。ただ、実際に始めてみると、思ったより普通の生活でありまして、行く前は結構構えてたんですけども、行って数か月すると普通の生活で、スーパーでの買い物とか庭の掃除とか、全然普通の生活です。ただ、日本食は非常にやはりおいしくてですね、日本食とか日本人が非常にいいものということに、特殊なものということに気づいたという、そういう生活でした。

2番目は、英語での議論ができるようになりたいということがありました。確かに英語をできるようになったんですけども、そこまで思ったほどうまくならないというか、自分に持っているものが出てきたという感じですね。個人的意見では、皆さん、例えば大学受験をすれば、それなりのポキャブラリーが身につくので、問題はそれを出す能力なのかなというふうに思います。もう一つは、大事なのはコミュニケーションでありまして、相手の外国人、現地の人はですね、少なくとも明らかなアジア人に、ネイティブの英語を話すことを期待していないところもありまして、ちゃんと相手の言っている意味がわかって、こっちが言っている意味を伝えられれば、コミュニケーション自体は十分に成り立つということ、僕はそういうことを経験しました。

3番目として、外国人研究者、友達や知り合いになりたいということでもあります。これもちゃんとできました、コミュニティ形成もちゃんとできました。

4番目はちょっと少し、ちょっとマイナーなんですけども、外国から出てくる研究成果は、すごくいいものがたくさんありました。伝え聞くところによると、外国人はそんなに働いていないのにたくさん論文が出るという

ことが、それが不思議でわからなかったので、その訳を知りたいということで行ったんですけども、やはり外国人でも非常によく働く人は働きます。本当にハードに働く人もいれば、帰りたい人は帰るという、基本的にそういうような多様性が認められて、あんまり人のやるにとやかく言わないというのが感想でした。サイエンスのレベルというのは変わらないんですけども、とにかくよく議論をするというのは違いでありまして、無駄な実験という無駄に体を動かすことを避けてます。日本人の場合ほとんどもやってみないとわからないからやってみようというのがあるんですが、そういうことはあまりせずに、とにかく議論をして無駄な実験を省くことをやっていました。

最後5番目は大事だと思うんですけど、日本人がどこまで世界に入り込めるか知りたいという感覚で行ったんですけども、日本人は全然対等にやっていけると僕は思っていました。世界的にも非常に特殊な能力の持ち主であると思います。我々の世界で言えば、手先が器用だったり、勤勉であったり、我慢強いというのは非常に日本人の特色でありまして、これは非常に武器になるというふうに思いました。

個人的には留学してよかったことは、これらのことを会得できたということと、特に外国人コンプレックスがなくなった。いろんな人がいるという、いろんな多様な価値観を共有できたことが個人的にはよかったなと思います。

それ以来、日本に帰ってきて職を得ましてからも、国際共同研究を進めまして、これはヨーロッパとアメリカだけを示しておりますが、ここ10年ぐらいで訪れた街と共同研究先、右側には3つありますけども、アメリカとかドイツとかでの共同研究を進めております。

特にその中に、国際色が高いのは、この絶滅危惧種の救済でありまして、今世界に2頭しかキタシロサイはいないんですけども、それを我々の技術で繁殖技術、iPS細胞から卵子を作りまして、それを繁殖に生かすというようなことを、一応国際コンソーシアムで、特にヨーロッパが中心になっておりますけども、この一員として混ぜてもらっています。当然この場合も、英語で議論をしまして、下にあるプレスリリースでも英語で議論をするということになります。

我々基礎研究というのは国際的な感覚が必ず必要になります。その理由の一つは、サイエンスに国境がありませんので、世界に向けて発信をするというのが基本です。真理を追求するということですので、真理に関しては国境がないということになります。研究成果の発表および議論は英語でありまして、これがスタンダードです。研究を進める上では国際共同研究は不可欠でありまして、特に専門性は自国の研究者だけではなかなか高いレベルを維持できない。さらには調達できる材料というのも、特に例えば先ほどのキタシロサイで言いますと、アフリカに行かないと手に入りませんので、そういうようなことが国際共同研究の必要性ということになります。

あとはこの研究コミュニティの形成です。これも非常に重要でありまして、やっぱり顔が見える、一緒に実際に顔を見て議論をするというような間柄になりますと、いろいろ、良いことがありまして。研究成果の評価であったり、研究資金の獲得であったり、いろんなコミュニティの中に入れるということが非常に重要であるということになります。

最後は、社会実装とか倫理というのは基本的に国際標準で決まりますので、我々の成果というのを実装する場合にも、当然国際標準で国際的な評価というのが重要になってくるということになります。特に海外の学会では、我々基礎の研究の学会へ行きますと、完全にこれは EDI が非常に重要でありまして、出身の国とか、もしくは当然ジェンダーとか年齢とか、思想とか、そういうようなことは全く差別してはいけません。例えばトークセッションがある場合は、トークをする人のジェンダーバランスというのは当然気にしていますし、出身地域というのもちやんと気にしています。

左側がヨーロッパの学会で、右側がアメリカの大きな学会なんですけども、ちゃんとそのようなことが明記されています。まだまだ国内の学会に行きますと、スピーカーが全員男性だったり、全員日本人、それは国内の学会で仕方ないですけども、なかなかそういうところの意識がまだまだ浸透していないなと思います。こういうコンセプトを理解するために、本当に国際的に多様性というものの理解が必要で、これを根元から本当に理解するためには、ちゃんとした国際感覚というのが重要なのかなというふうに思います。

若手研究者の留学のススメと障壁ということに関して、少し5分ぐらいで話したいと思っておりますけども、私のことだけを振り返りますと、留学、比較的遅かったんです。なんで遅かったのかなと思いますと、そもそも現実として海外に住むという選択肢がありませんでした、正直言いますと、途中、研究者といろいろ会ってお話を聞くと、そういうような話が選択肢に出てきたというのが現実です。言語に対する不安というのは実際にありました。

もう一つ、自分と異なる人たちに出会って過ごす不安というものも、当然若い頃はありました。私の経験からすると、こういうことが、幼少時に海外の環境に慣れていけば、もしくは海外の人と交流できる機会があれば、かなりハードルは低くなっただろうと思います。自然科学では早ければ良いというわけでもないんですけども、思った時に留学できる方が良いので、小さい頃とか若い頃からこういうようなハードルを下げてい

く努力が必要なのかなというふうに思います。

これ、私だけのバイアスかなと思ひまして、私の研究室の学生さん、かなり多くいるんですけど、現在20代ですが、じゃあ君らはなぜ日本にまだいるの、ということいろいろ聞きますと、この海外に行かない理由、特に小中高時代とありますけども、先ほど私の感覚とも少し重なる部分がありますが、そもそも行く選択肢がなかったとかですね。英語力に自信がなかった、お金が足りなかった。特に今はちょっとなかなか難しいところあるみたいですけども、お金が足りなかったと。必要性を感じなかったというのが、結構我々にとっては自然科学の世界では大きいかなと思うんですけども。

日本、それなりにサイエンスとしてはレベルが高いんですけども、それだけじゃないということもちゃんと伝えなきゃいけないのかなというふうに思いました。生活の立て方、基盤の立て方をイメージ、向こうでの生活をイメージできないというのがありますし、国内の学業や受験勉強の遅れが気になったというのが結構大きな意見でした。行ったとしても、向こうでのキャリアパスの見通しが見えないのは不安だったとかですね。もしくは不自由のない国内生活とのトレードオフというのが見つからなかったと。海外生活は旅行で十分。これはほんの一部の意見ですけども、このように思ったというのが行かなかった理由となります。

こういうふうにインタビューした学生さんたちは、今全員海外に行きたいと思ってます。実際に卒業をしたら、海外に行かせることを前提に、いろいろプランを練っているわけですけども、その理由としては必要性に気づいたとか、海外経験を持つ人と会うことでイメージが湧いたとか、憧れ研究者のキャリアパスを見てそうなりたかったという具体的なイメージができたとか。さらには海外での研究機関や研究スタイルを知りたいというのも大きな理由です。いろいろ知識がつくと、やはり海外研究に行きたいと、海外機関に行きたいというふうに思い始めているようです。

まとめますと、留学のプレーキとしましては、選択肢にないとか、英語の不安とか生活の不安、現状とのトレードオフってというのがあるのかなと思います。それに対して、アクセル、背中を押してあげるためには、その必要性とか、具体的にイメージを湧かせてあげたり、もしくは憧れをきっちりイメージできるようなことを提供したり、海外で活躍する自分のイメージというのを湧かせてあげるといったのが大事なのかなというふうに思います。

異なる文化や価値観へのハードルを早期から取り除くことは非常に重要だと思います。具体的なイメージも抱くということが重要でありまして、この場合には、例えば留学先、短期留学でも良いんですけども、実際に向こうで活躍する日本人、例えば野球でも多分小学生の頃は海外で活躍する大谷翔平とかを見て、ああいうふうになりたいと思うはずなので、そういうようなイメージを湧かせることがあらゆる面で大事なのかなと思います。

日本人というのは非常に独自性とか特殊な能力を持っている集団でありまして、少なくとも我々の分野では、日本人は、どうしてもある程度の劣等感みたいなものがあるかもしれませんが、そういうのは排除していくことが非常に重要かと思ひます。

最後は、海外に踏み出す後押しというのは、具体的にサポートというところが必要なのかなというふうに思ひます。

はい、以上です。どうもご静聴ありがとうございました。

(秋田座長)

林様、大変刺激のお話をありがとうございました。

それでは、プレゼンテーションを受けまして、知事から何かございますでしょうか。

(小池都知事)

はい、ありがとうございます。留学経験に基づいての具体的なお話でございました。最近の円安も手伝って、なかなか留学のハードルが高いという中ではございますが、いろんなご経験のお話を伺って、改めて、若い学生さんたちに、呼びかけも、また、先ほど最初にご紹介しましたけれども、いろいろグローバルパスポートなどでサポートしておりますので、そういった形をより努めていきたいと思っております。そうですね、あと、私、何よりも最初の研究内容にびっくりしまして。これって男性からも子供が。

(林プレゼンター)

男性からも卵子はできますね。少なくとも実験動物レベルではできるようになっています。

(小池都知事)

雄からも。

(林プレゼンター)
卵子ができますね。

(小池都知事)
卵子ができて。

(林プレゼンター)
原理的には。

(小池都知事)
子供が生まれる。

(林プレゼンター)
生まれますね。

(小池都知事)
可能性がある。

(林プレゼンター)
ありますね。動物では証明されています。

(小池都知事)
すごい。もうびっくりしますけれど。やっぱり留学することによって、世界の情勢というか、感覚がね、身につくっていうのは一番大きな学びだと思うんですね。研究とか学問的なこともさることながら。そういったことについてもお話しいただいてありがとうございます。

また、アドバイザーボードの皆様方も、やはりツールとしての言語を、いつの頃からどうやって慣れさせていくか。恐怖心みたいなのが日本人はどうしてもあるように思うので、それを、どのように払拭していくのか。それはまた別の機会に、先生方からもお話を伺いたいと思っております。

将来、グローバルな社会で活躍できるような子供たちを是非とも育てていきたい。

今日のお話、参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

(秋田座長)
小池知事、どうもありがとうございます。
知事は次のご公務の都合上、ここで退席となります。知事どうもありがとうございました。

(小池都知事)
ありがとうございます。

(秋田座長)
それでは続きまして、意見交換に入りたいと思います。
まずは林様のプレゼンテーションを受けて、各委員からご発言をいただきます。
林様へのご質問もあれば、併せてお願いをいたします。それでは順番に、お一人3分を目安にお願いしたいと思います。

それでは藤田委員から順にテーブルに沿って、よろしく願いいたします。

(藤田委員)
はい、ありがとうございました。非常に面白いというか、個人の体験に基づいた形で、いろんな示唆が得られるのかなというふうに思いましたけれども、私自身は言語という部分を専門にしておる人間でして、今回の発表の中で、実際に行ってみて、言語に対する恐怖心があったんだけど、行ってみたら別にネイティブライクである必要はないしというようなところで、そこから研究の方の中身に入っていったというようなお話があったかなというふうに思うんですけれども、いわゆる外国語(フォーリン・ランゲージ)という言い方で考えるものと、最近の考え方では、むしろリングフランカ、共通言語という考え方があります。

だから外国語として、例えばネイティブスピーカーをモデルにしながら話をして、同じように彼らと同じよう

に話をするをある意味目指すという考え方ではなくて、当然各国の人たちが共通言語としてたまたま共通で通じ合う言語として、英語なら英語というものをツールとして使うというような考え方。それでは当然、例えばお国訛りとかがあっても然るべきであろうというような考え方。

むしろそっちの方でという形で、ヨーロッパでは、これまではどっちかっていうと、いわゆるマルチリンガルって、例えばバイリンガルの人っていうと、英語と日本語と、例えばですけど、何でもいいんですけど、なんかどちらも同じぐらいできる人がバイリンガルなんだみたいなイメージを持ってるんだけど、そういうマルチリンガルではなくて、むしろプルリリンガルと向こうの言葉で言いますけれども、複言語主義という言葉で言っています。

それは自分に必要な、例えば商売をやってる人だったら、物を売り買いすることに、例えばこの言語でやればいい。あるいは例えば自分の趣味が、美術ですみたいなことがあれば、例えばイタリアの博物館に行くと、その説明のところが読めればいいんであって、別にそれで政治の話はできなくてもいいんだと違って、その必要に応じた言語の使い方ができるという、そういうものを複数身に付けていくみたいな方が、より豊かな生活ができるんじゃないかっていうような考え方っていうのもかなり浸透してきているかなと。

だから日本人も何か常に完璧主義みたいなことをつついって、それが故に逆にそれがコンプレックスになって、結果的にできませんっていう形で終わってしまっているっていうようなこともあるのかなと。

です、そこら辺の考え方をこれから次の多分議題になると思うんですけども、幼少期の頃からあまりそういうことを意識しないうちから触れていくみたいなことも大事になるのかな、なんていうふうに、ちょっと感想めいた形で申し訳ないんですけども、思いました。

ありがとうございました。

(秋田座長)

藤田委員ありがとうございます。ご専門の観点からお話をいただきました。

それでは、続きまして、サコ委員お願いいたします。

(サコ委員)

貴重な講演、ありがとうございました。私自身も日本に普通に留学してきて、当然、日本語がわからない状態で日本人とコミュニケーションを取らなきゃいけなかったんですね。

一番最初にやっぱりショックだったのは、日本人とのファーストコンタクトって、まず私を「フレーム化」してから知っていく、みたいな感じがあったことです。

とにかく事前情報を皆さん結構勝手に取り入れて、「こういう人だよ」って当てはめながら確認していく、みたいな。多分日本人同士もそうなんだと思うんですけど、「山形の人はこうだ」とか、私も聞きましたよ、「名古屋人はケチ」とかね。研究室でも「あいつ A 型かな」「いや、あの机の汚さだと O 型ちゃう？」みたいな話がずっとあったりして。で、私は自分が A 型か O 型か、実は血液型がわからなかったんです。私たちの感覚では、あんまり重要じゃないから。だから、わざわざ病院に行って調べたんですよ。そうやって見ていくと、日本の方って、相手へのアプローチが結構難しいなって感じるが多かったです。

今、林先生も海外に行くと、最初は躊躇しながら、付き合ってみたら意外と難しくないじゃないか、という話をされてましたよね。確かに、私が来たのはちょうどバブルが終わりかけた90年代で、当時は「別に外国に行く必要はないんじゃない？」「日本に何でもあるし」「お前も日本に憧れて来てるんじゃない？」みたいなことを結構言われてたんです。だから私も「これはちょっと崩さなきゃいけないな」と思って。最初にやったのが、海外旅行を企画したことです。行き先は、ベトナムでした。彼らが想像もしなかったベトナムの人たちのエネルギーとか、日本では見られないものとか、そういうのに触れて、みんなショックを受けて帰ってきたんですよ。その時に見えてきたのが、外国に行くっていうのは、結局「外国がどうこう」っていうより、一番見えてくるのが自分なんだ、ということです。自分と向き合うというか、他者と出会う、異文化と出会うことで見えてくる自分って、すごく大事だなと。だからそれ以降、大学でも異文化コミュニケーションとか、海外に行くことを必修にしたり、自分の研究室では必ず海外旅行を入れたりしました。研究だけじゃなくて、もう本当に1週間行ってくるだけでもいい、という感覚ですね。

2 つ目は、林先生のお話の中にも出てきましたけどコミュニケーションの手段の問題です。皆さんご存知のとおり、日本はハイコンテクストなコミュニケーションなんですよ。暗黙知が多くて、「言わなくてもわかるでしょ」「相手が想像してね」みたいなところがある。エドワード・ホールも言っていましたけど、そういうハイコンテクストが強い。

一方で、海外に行くと、結構言葉どおりなんです。ローコンテクストなんですよ。日本の「空気を読む」はハイコンテクストだから、これが留学生には一番わかりにくい。日本の方は「言ったでしょ」って思ってるけど、こっちは「いつ言ったの？」ってなる。だから、留学で苦労するのは、まさにそこだと思います。逆に、日本の方

が海外に行く時に一番失敗しやすいのも、たぶんこのローコンテキストのほうなんですよ。めちゃくちゃストレートに来る。でも、それに慣れていくと、実はローハイの組み合わせができるようになる。ここが、結構重要なんじゃないかなと思っています。

最後に、これからの議論にもつながると思うんですけど、「なんで留学するのか」って、専門性だけじゃないんですよ。自分自身をちゃんと見極めること、いろんな人とやり取りすることによって、研究が深まること、そして、自分の可能性が見えてくること。そこが大きいと思っています。

それから、ポリグロットというか、複数の言語を話すのが当たり前の世界もある。私もそうなんですけど、言語を話す時に文法がどうこうより、まず言葉で相手に伝える。つまりコミュニケーションとしての能力ですよ。それをどう普遍化していくか。だから、日本の「四技能をちゃんとしなきゃいけない」という発想は、どこかでどう変えていくか、というのが私の意見です。

林先生、ありがとうございました。

(林プレゼンター)

はい。私が留学して一番最初に思ったところ、まさしくそういうところでありまして、日本人の阿吽の呼吸というのが全く伝わらない。向こうの人はその何も言わなかったら何もしてくれないんですよ。ただ、何か要求すると本当に喜んでやってくれるという、本当に何か言わないと何かものが始まらないんだってことは非常に感じて。それこそ日本の特殊性というのは、そこを感じたところの一つでした。はい、ありがとうございました。

(サコ委員)

ありがとうございます。

(秋田座長)

サコ委員ありがとうございます。それでは続きまして、内田委員お願いいたします。

(内田委員)

ありがとうございます。本当に私も最初の研究のことについてまずドキドキしながら伺いました。

今日は本題の方で、後半の先生のご経験からいろいろ考えたことがいくつかあるんですけど、私自身も出稼ぎ経験と申しますか、留学に行ったわけではないので、外国で暮らしたっていう経験があって、その後学校に行ったっていうこともあるんですけど、その時のことを思い出しながら伺っていました。

やっぱり、私は30代になってから行ったんですけど、どうしてもっと若い時に行こうとしなかったかなということも考えました。

私は多分、とても東京自体が外国のような気持ちになるような田舎の出身なんですけど、でも私が英語を嫌いにならなかったっていうのが、たまたま自分の地元に来てきた AFS の留学生の高校生、その受け入れ家庭がそこに高校生いるよって言って私を呼んでくれて、関わったことがあった。その縁で、卒業旅行でアメリカに行こうと思った。で、帰ってきた。

その後行かなかったのは、やっぱり行くっていうことの方法がわからないっていうのは、若い方のお話でありましたけど、どうやったら行けるのか、行く可能性さえ見えないっていう時には、やっぱり行けないですよ。可能性がわからない。どうやってお金を得るのか。それから生活基盤を作るのか。そのきっかけができるんだっていうモデルをどこかで見たことがあるかどうか。

私がお後、30代になってから行ったのは、モデルを見たことがあったというか、家族が先に行ったからっていうのがあるんですけども。私も仕事がなく、仕事しに行ったんですけど、行ってみてもいいのかもしれないと思ったとか、そういうきっかけづくりっていうのは、いろんなところに散りばめてあると変わっていきけるということもあるのかなと、自分のことも顧みながら考えたりしていました。

もう一つ、私が向こうに行った時、なんで自分がやれたのかなっていうその答えもちょっと今日いただいたような気がして。お話の中で、先生が気づかれたことの中に、日本人の強みとか独自性とかありました。そこでやっぱり自分自身とか、自分のあり方にある程度誇りを持っていないと、もう全てアメリカだとアメリカ人はすごいと言ってしまおう、もう周りがすごい。だから英語ができない、その文化になじめない自分は悪い人、悪い立場っていうふうになってしまったりする。

そういうのではなくて、自分もそこであっていい、やれていけるっていう、気持ちというか、アイデンティティというか、それを育てておくっていうのも、とても大事なんだろうなと改めて思いました。

また、この後いろいろ考えていくこともあるかと思いますが、このぐらいにさせていただきます。ありがとうございました。

(秋田座長)

内田委員、どうもありがとうございます。
それでは続きまして、荻野委員お願いします。

(荻野委員)

林先生、どうもありがとうございました。私は今、特にミャンマーとか、バングラデシュとか、スリランカから90名ぐらいの学生を、日本の大学に入っていけるように、日本語教育を施す学校で校長をしているんですけども。その前は、約10年間、逆に帰国生徒たちを、お預かりする学校で仕事をしてまいりました。その帰国した生徒たち、また、今アジアから来ている学生たちに、ある種概してですけども、共通して言えることは、非常に熱量が高いと。自己肯定感が高いということなんです。そういったのをエンジンに燃料にしながら、エンジンを今ふかしていると、そんな感じかなという印象を受けるわけです。

先生の先ほどのお話の中に、日本人の独自性、強みがあるんだというお話もね、ありましてですね。こういうことに多くの人が気づいてくれると、もちろん経済的なこと、政治的なこと等いろいろありますけれども、まず心の中で、こういったことに気づいてくれると、比較的そのハードルが低くなるのかなというふうに思ってるんです。

先生、日本におられた時、そして実際に、外国に行って勉強された時、この日本人の強みの見え方が、どう変わったのかというあたりも、ちょっと簡単にお話をいただけるとありがたいなというのが一点です。

それからやっぱりロジックですね、論理性。やっぱりこれが世界でいろんな人と話していく中で、いろんなコミュニケーションをとっていく中で、信用されるとも重要なファクターだというふうに思ってるんですけども、先ほどのお話の中で、日本人、論理性がやや弱いんじゃないかというお話がありましたけども、先生がお感じになられた、日本人のやや弱いって、その辺の見え方がどんなものであったのかなというのを、この二点お聞きしたいなと思いました。よろしくをお願いします。

(林プレゼンター)

手短にお答えしますが、その日本人の特殊性というものに関しては、やっぱり先ほど言った特殊性そのものはそういったとおりなんですけども、なかなか行かないと、日本の国内だとなかなか見えてないところがありまして。いろんな人と交わると、そのいろんな人の特徴が見えてきますので、その中で日本人っていうのは、そういう世界のいろんな多様性のある人々の中でどういうポジションにあるかっていうのは、それがやっとなんて見えてくる。その中でいいところと悪いところが見えてきて、いいところは先ほども言ったようなところで、そういうのを伸ばしていくと、もっともって世界でもプレゼンスを得られるというような自信が出てくるんじゃないかなというのがある一つあります。

後半のそのロジック、論理構成に関しては、日本人、そういう意味ではそれもトレードオフというか、その表裏だと思うんですけど、非常に真面目なので、その想像して、何ですかね、話を展開するっていうところがなかなかちょっと弱いというか、特に我々科学の世界だと、こういうふうになったら、次こういう展開があるよねと。こういうふうになったら、次こういうふう、こういうことが起きて、こういうふうになるはずだよって。そういうその想像というか、論理展開が、日本人の場合は弱い気がします。

よくイギリスですとティータイムに行って、みんなで研究の方向性を話すんですけど、そうすると曲がり角を3つも4つも想定して、向こうの人は話すんですけど、日本人の場合は曲がり角2つぐらい行ったら、とにかくこの曲がり角2つぐらい一回試してみようよとなります。それから見える風景を見ようよって、いいところも悪いところもあるんですけど、そういう、なんて言うんですか、日本人のある意味真面目なところが、ちょっとその空想で物事を進めていくことに少し恐れているというか、そういうところでちょっとロジックが弱いかなというふうな、論理構成が弱いかなという気はちょっとしています。

(荻野委員)

ありがとうございました。

(秋田座長)

荻野委員、どうもありがとうございます。それでは柴山委員お願いいたします。

(柴山委員)

林先生、どうもありがとうございました。大変に興味深く拝聴しました。私は人の成長、発達を扱う発達心理学を専門にしておりますので、そういう観点から二つのことに気づきました。

一つは、先生がその博士課程の研究の場所を、日本国内の研究所からケンブリッジ大学に移動させたという、物理的な移動は、他の複数の移動と深く関係していたのではないかとことです。

具体的には、ケンブリッジ大学で、30代半ばから後半にかけての約4年間を過ごされました。また、留学した後の30代後半から40代というキャリア形成期は、大学の医学研究科の講師から准教授となってお活躍されています。つまり、国境を越えた物理的移動である研究留学が、林先生の成人期から壮年期のライフコースの移動と大学教員としての職位の移動を促進するプラスの方向に、よい影響を与えていたと考えられます。

もう一つは、林先生のお話から、若手研究員としての留学という物理的移動の経験の中でも、特に二つのことが経験の核になっているのではないかと感じました。

一つ目は、共通の目標を持った同僚とのコラボレーティブな研究活動に取り組むということです。

そして二つ目は、こうした協働作業を通して、多様な背景を持つ他者が先生の研究仲間になり、ご自身も研究コミュニティの一員としての感覚を持つようになることです。

つまり留学経験の核にあるのは、多様な背景を持つ人々と単に接触し交流するという事に留まらず、対等な立場で共通の目標に向けたコラボレーティブな活動に一定の期間継続的に参加することが大事なのではないか。以上の二点が示唆されました。

最後に質問させてください。先生がこの段階でケンブリッジ大学に留学されようと思ったきっかけや理由を教えてくださいませんか。

(林プレゼンター)

きっかけは、いつかどこかで留学したいと思っていたんですけども、その自分に関しては、その留学先で何をするかと考える時に、やはりある程度のスキルがないと、多分自分で何か放り出された時にやっていけないというふうな気がありましたので、自分でできるだけスキルというのを日本で身につけて、それでイギリスで4年間研究をした。実際にそれは基本的にその研究室はあまり手取り足取り面倒を見ないところでありまして、自分のそのような持ってたスキルが非常に役に立ったということがあります。

先ほども私のプレゼンでありましたけども、早ければいいということでもなく、そういうようないろんなバランスというか、ファクターがあって、留学、もしくは海外での経験でより多くのものを得られるような、そういう個人個人のセットと、あとは向こうの受け入れ先の要求とかセットがあるので、そこがうまくマッチさせることが重要なかなと思いますし、僕の場合はそれがうまくはまったところだと思います。

(柴山委員)

ありがとうございました。

(秋田座長)

どうもありがとうございました。今までの委員のお話を聞いて、林先生の方からご意見などありましたら、補足でお願いいたします。

(林プレゼンター)

そうですね。もう既にほぼ言われたとおりなんですけど、本当に印象に残ったのは、コモンランゲージと共通のコミュニケーションのツールとしての言語と、それで共同作業をする上で私もそうだったんですけども、共同作業をするというのがまず目的であって、それを遂行するために、先ほどもある一定の範囲の言語というのはありましたけども、本当にそれを遂行するために、その言葉を使うという、そういう感覚というのは非常に重要なかなと思いますし、日本人って、特に今の若い子と話す時、やっぱり受験勉強というのがやはり結構大きなウエイトとしてあって、文法一つ間違えちゃいけないとか、そういうのが非常に意識として強いので、それよりはそういう共通言語というところで使っていくというような感覚がいいのかなというふうに思いました。

あとは委員の方にもありましたけども、その日本人の、何て言うんですか、やっぱり日本の中にいると、やっぱり日本のリズムで動きまわって、それが当然になってしまうので、海外に行った時に本当に面を食らうという。いろんな文化とか人との間合いとか全然違いますので、それは本当に行ってみないとわからないことですので、いかにこっちで教育しても、半分以上は日本人の社会の中で、なかなかその逆の、例えば日本人が例えば5%しかいないようなところでの経験というのは多分なかなか難しいと思うんですよね。ですので、やはりそういう、これこそチキンアンドエッグでどっちが先かって問題になるんですけど、そういう非常にその日本人がマイノリティーのところに行って、そういう自分の特殊性であったり、いろんな人々の接し方の違いだったりというのを学ぶのは本当に重要なかなというふうに思いました。

(秋田座長)

ありがとうございます。
サコ委員どうぞ。

(サコ委員)

はい。すみません。林先生のところで、皆さん結構拾われてたんですけど、「見えた日本人像」って話の中で、勤勉だっというのを皆さんおっしゃってたんですよね。でも、私が日本に来てから気づいたのは、なんかね、時間かけてる割にはあんまり中身がないことが多いなっていうことなんです。

研究室で仕事してても、みんな時間ばかり気にしてる感じがあって。私が来て一番最初に喧嘩したのもそこなんです。私は昼間来て仕事して、帰る頃に、今度は夜来る人がいるんですよね。京大ってよくあるじゃないですか。で、その人は朝までいる。そしたら「留学生は真面目じゃない」って言われるわけですよ。夜いないから。でも、夜いることが重要なのかどうかって話じゃないですか。結局、プライベートを崩したら「あなたは真面目」って評価される、みたいな感覚があって、全然効率よくないなって思ったんですよね。残業だけつけとるやん、みたいな。

で、二つ目が、やっぱり同調圧力なんですよ。意思決定ができないというか、自分で決められなくて、誰かの責任にする。先輩に聞くとか、上に回すとか。私、来た時、先輩後輩の感覚がよくわからなかったの、「なんで決めないの？」って結構思っていました。

それと関連して、今日ちょっと子供の話なんですけど、10歳までの子供ってめちゃくちゃ面白くて、何でも言うじゃないですか。思ったことを。でも、10歳を超えたあたり、急に周りを気にし始める。あれって何なんだろうって。あんなに一生懸命受験して大学に入っても、結局あんまり決められない人が多くて、同調圧力にやられてる人がいっぱいいる。

そこで私は、「日本人って本当に協調性があるのか？」って思ったんですよね。諦めたり、意見を言わないほうが楽、っていうふうに見えることもある。だから、そこで見えた日本人像を勤勉って言われたら、もちろん特殊にすごい人はいっぱいいるんですけど、いや、ちゃうな、って思うんですよ。時間だけかけてる、みたいな。ドイツとかと比べると特に、仕事に時間をかけてる割にはっていう場面がある。学長をやった時も、そういうのがいっぱい見えてきた、っていう感じでした。先生はどうです？

(林プレゼンター)

耳が痛いところでありまして、その同調圧力等々に関して、ちょっと僕の専門ではないので、おそらくもう少し教育の専門家の方がおられると思うんですけども、特に我々研究室のことに言いますと、確かに時間をかける方が偉いんだというのがあります。

僕はこれだけ一日働いたから努力してるんだって、そういう価値観というのは、まだありますね。我々の時代の時はもっと強かったんですけど、今の若い人たちはだんだん是正されてますけど、まだ、いまだに海外の人に比べると、長い時間をやるというのは偉いっていうのがまだあります。比較として、これはなぜ、原因なのかわかりません。

特に海外で思ったのは、先ほどもちょっとありましたけども、来たい人は来てやるし、帰りたい人は帰ってやるし、大事なものは成果であって、やらない時は全くやらない。それでいいんだと。バケーションもいつ取ってもいいんだと。そういうような感覚っていうのは、非常に私にとっては当時は新鮮でありまして、我々その時点は少なくとも自分の研究室にはそこは導入したいなというふうに思っているところでありまして。

(秋田座長)

ありがとうございます。林先生のプレゼンテーションから、本当に多様な論点に広がっていきながら、私もお話を伺っておりました。

どうしてもやっぱり日本は協調とか同調とか同質ということが公教育の中で強められていっている。そういうところがむしろ多様性を奪っていくところがあるのかなと思いました。

逆に林先生が留学という違うところに、違うコンテキストに身を置いてみて、多様な価値観の中で、先ほどもお話がありましたように、協働するというような、ある種の、やっぱりただそこに行っていればいいのかではなくて、ある種一緒になって活動をしていくということによって、その中でもう一つの私とか、もう一つの可能性としての日本人という、丸ごと日本人対海外と言えないと思うんですけども、日本人のある種の強みや良さを築いていって、それによってより海外の方に対するコンプレックスとか、そういうものを乗り越えていけるんだというようなお話というのは本当に大事なだと思います。

私は海外には行きますが、留学経験は全くないんです。けれども、その中で逆に日本にしかない教育制度

を海外にレッスンスタディというんですけれども、伝えるような仕事をしていくと、海外の人が知りたいということで、コモンランゲージと藤田委員が言われたように、もう下手でもそれをやっぱり伝えることが自分の仕事だと思うと、だんだん伝わって行って、お互いに繋がっていったりというような経験をしてきたことがあります。

東京で暮らす子供たち。東京の話なので、国際都市である東京で子供たちがいろんな気づきを、得ていくというようなことが重要ではないかと思います。こうした環境をじゃあどういうふうに作っていくのか。言語の問題だけではないと思いますので、そのあたりについて今後の課題でありますけれども、皆様ともう少し深めていきたいというふうに考えております。

そこで続きまして、事務局より説明のありました二つの論点について、各委員からご発言をいただきたいと思っております。それぞれ順にご発言をいただきたいと思っております。

それではまた藤田委員からということで、恐縮ですけれども、ここに出されています、二つの論点についてお願いいたします。

(藤田委員)

はい、ありがとうございます。そうですね。まず、この求められる素養ということだと思っておりますけれども、簡単に言ってしまうと、私は多様なものが受け入れられる受容性みたいな、それは言語かもしれないし、文化かもしれないし、いろんなものがあると思っておりますけれども、その多様なものを受容できる耐性みたいなものを持っているというのが、多分この一番大事な素養になるのではないかなというふうに考えております。

それを育てていくためには、やはりそういうもののでできるだけ若い時から触れていく。これもお話の中にもあったように、ある程度若い時になれば、そこら辺のハードルが下がっていくという話が、先ほどの話の中にもあったと思っております。

例えば言語の話でいうと、大体人間って3歳ぐらいまでというのは言語を区別しないんですね。だから例えばですけども、国際結婚とかで両親が違う言語を話していて、3歳ぐらいまでってというのは、どちらの言葉を話してると全然気にせず当たり前のように入力していくというようなことがよくあって。それが4歳、5歳ぐらいになってくると、だんだん言語の違いというものに着目し始めるみたいな段階が発達としてはあるんですけれども、今回のこの議論の中で、割と幼児の方に中心に着目していくというようなお話だったと思っておりますけれども、そういう意味では、まだ就学前ぐらいの、あまり先入観とかそういったようなものを持たない年代のうちに、様々な背景を持った人々たちと触れ合えるような機会を創設していくということが、この環境としては大事だというふうに思いますし、その意味では東京都というのは、そういういろんなバックグラウンドを持った人たちがまさに集まっている場所なんだろうなというふうに思いますので、それをそういった様々な取組、今ここで具体的に何ってわけではないんですけれども、やりやすい環境にあるのかなど。

例えばですけど、私が勤めている大学も、ここから隣の駅のあたりにありますけれども、今、2000人以上の留学生が大学に来ていて、しかも国籍も90か国以上という非常に様々な人たちが集まっている、そういう中で、私が今、言語教育研究センターというところのセンター長をやっておりますけれども、22の言語をその授業として全学部の学生に対してオファーするってというようなことをさせていただいています。

そういう意味では、自分とこの勤めている環境の中でも非常に多様性のある特に言語的な、しかもその言語っていうだけではなくて、先ほどから話があるように、その背景にあるような文化みたいなもの、それに触れる機会っていうものが、そういうふうな大学でもあるだろうし、あるいは本当に今、この都庁がある新宿区なんていうところにはどれだけの国の国籍の人が住んでいるんですかっていうようなことを着目してみれば、そういうところで触れる機会っていうのもいくらでもありますので、そこをどのような形で、いい意味で活用できるかっていうところがこれから大事になっていくのではないかなというふうに考えております。

とりあえず以上です。

(秋田座長)

藤田委員ありがとうございます。

それでは続きまして、サコ委員お願いいたします。

(サコ委員)

ありがとうございます。多分、先ほど多様性の話が出てきたと思うんですけど、私が日本に来て感じるのは、日本って「差」が悪いものみたいなイメージが結構強いんですね。だからできるだけ差を埋めなきゃいけないって、方向にすごく努力する。でも私が大事だと思うのは、差を楽しむことなんです。差があることをまずアクセプトする。そこに結構努力が必要なんじゃないかなと思います。

教育現場ではそれはよく出てきて。さっき言ったみたいに、10歳までの子って元気で活発で、思ったことをすぐ言うじゃないですか。私もよく学校に遊びに行くんですけど、学校行く時に一応、自分で芸名を作ってるんですよ。「なすびタコ」という名前なんですけど、まあこれはあまり重要じゃないんですけど。で、10歳くらいの子が普通に言うんですよ。「なすび先生、なんで黒いの？」って。私も一応大人として答えなあかんかなと思って、「テニス焼けや」と言うんですよ。そしたら、子供がめっちゃ深く考えるんですよ。「うちのお父さんもテニスしてるけど、こんなに黒くない」と言うから、「君のお父さん、もしかしたら甘いんちゃうかな」と。でも話しているうちに、こっちも気づいてくるんですよ。「あ、テニスだけではここまで黒くならんな」と。ここで重要なのが、答えを教えてないことなんです。問いと答えの間にある無数の好奇心を引き出す。これ、すごい大事だと思うんです。でも、これって大きくなればなるほど、引き出せないようにされていくんですよ。そこが、多分日本の教育現場でまず変えなきゃいけないことの一つ。

二つ目は、自己と向き合うことです。自己と向き合う過程って、結構怖いんですよ。どっちかという、他者にどう合わせるか、っていう方向にいて、自己から逃げていく感じがある。

私、学生を見ていると思うんですけど、1年生の自己紹介とか、みんな結構下手なんですよね。「君の考えは何？」って聞いても「先生が言うには」とか、「誰かが言うには」というのがよく出てくる。でも、海外で通用するには、自分を語らなきゃいけないんですよ。自分の文化を知らなきゃいけない。ある学者が言ってたんですけど、社会学者のリチャード・セネットかな、「足元を見るのがグローバル化の第一歩」だと。要するに、自分って何者なのか、ってことです。海外に行くと結局聞かれるのが自分なんです。「あなたの国ではどうなの？」「あなたはどの国の？」って。そこで“あなた”が語れないと、なかなか通用しない。だから、教育の中で、できるだけ徹底的に、自分たちのアイデンティティに気づいていくことはすごく重要じゃないかなと思います。言い換えると、アイデンティティ・クライシスを超えるということですね。

三つ目は、先ほど藤田委員も言ってたように、日本にも今、外国人がめっちゃめっちゃ増えているので、そこをね、資源として活用することです。どんどんその外国人と遊ぶ、触れ合う。私も1年間ずっと小学校に「なすびタコ」で通ってたから、今ほんまに街中歩いてても、「なすび先生じゃない？」って見られたりして、もう抵抗がなくなるんですよ。だから小さい頃から、外国人と触れ合っていると、「全然普通じゃん」「友達じゃん」「会いに行きたい」と気持ちになる。その機会を子供たちに増やす、という環境づくりがすごく大事なポイントだと思います。国際学校もいろいろありますし、そういうところの人たちとも交流する。これは、かなり重要だと思います。

以上です。

(秋田座長)

サコ委員ありがとうございます。

それでは内田委員お願いいたします。

(内田委員)

はい、ありがとうございます。私、専門が幼児教育・保育ですので、やっぱりそちらの方に引き寄せて考えるんですけど。グローバルな素養の中で、今お話の中にも出てきた、違うものに出会った時の開放性というか、オープンに対応できるとか、それから新しいことに出会った時とか、状況に対するレジリエンスという言葉が浮かんでたんですけども。そういったこととか、小さい子供たちって、もう日々新しいことに出会って、実は小さい小さいマイノリティー体験は別に外国の人に出会う前でもいっぱいあって、意見が違う、自分だけ違う、好きなことが違うかもしれない。でも同じことを好きな人がいるとか、でも違ったように表現しているとか。でもそれが受け入れ方を学んでいる最中の子供たちって、そこにより大きな違いとか、違ってても大丈夫とか、それについて自分が違っていても、他の子がそれを受け入れてくれて、自分の意見を聞いてくれてたりとか。違って、自分だけができなかったってことがあっても、できない助けてっていうことが言えるとか、そういった小さな体験の積み重ねっていうことを思い浮かべながら伺っていました。

その時に、私は保育者とか先生の養成も専門なので、やっぱりそういう時に子供たちがそういった経験ができるかどうかって、やっぱり周りの大人がどうかっていうことがあると思うんですね。そうすると、保育者とか周りの大人とか、ご家族も含めて、その社会に先入観ないって言っても、親とかの思ってることって結構取り込んでいて、やっぱりそれを持って園にやってくるわけですよ。そういったことに気づいて導いていくためには、私、多文化共生保育教育っていう授業を大学で担当しているんですけども、そういう時にやっぱり学生さんたちとしなきゃいけないのが、あなたって誰っていうこと。どうして今そういう考え方するようになったのっていう振り返るワークをやったりします。その時にやって初めて気づくことってあったりもするんですよ。で、また学生同士もいろいろ話をする中で、違いに気づいて、違っていいってことを学校で体感していくとか、大学生になってもそういったことは大事だなと、ちょっと脱線してますけれども、感じたりします。

ですから、先ほどのプレゼンテーションでも出てきた DEI ということも、やっぱり子供たちのグローバルな素養というところですか、それに必要な環境を整えるということにキーワードになっていくのかなということも思ったりもしました。

以上です。

(秋田座長)

内田委員ありがとうございます。

それでは続きまして、荻野委員お願いします。

(荻野委員)

はい。求められる素養。私は先ほど林先生のお話の中で、DEIのお話もありましたけども、これ、研究者ならずとも、これはもうレベル感様々あると思いますけれども、年齢に応じて、そういった感覚、特に人権意識です。人を大切にすることです。そして何て言うんですか、自分だけの世界で人を裁かないと。そういった感覚がやっぱり一番重要なことなんじゃないかなと。ここがスタートなんじゃないかなと日々考えているわけです。

それにはやっぱり周囲の大人という話もございましたけども、保護者の方、周囲の大人、またコミュニティ、そういったところで、そういったことを阻害している要因が、本当にないのか。この辺のところは多分こちらの連携室の方で、ずっと今までやってこられたことだと思うんですけども、こういったことが正しく行われる社会こそが、グローバル人材を生んでいく社会ではないかなというふうに感じている次第なんです。

あと、そういったことの中で、やはり先ほどもちょっとお話したわけですけども、日本人の強さ、もっと言うと日本人としてのアイデンティティ。そういったものにいろんな段階で気づかせていく。なかなか海外に出ないと、それが相対的に見えないというところは、これはもうご指摘のとおりだと思うんですけども、やっぱりそういったところを育てていくということも重要ではないかなというふうには思っています。

実は私、高校の校長だった時にとても面白い経験をしているんですけども、総合的な学習の時間というのがその当時ありましてね。能の先生に週に一回来てもらって、生徒たちに能の主に謡ですけどもね、謡の、もちろん舞もありましたけれども、を本当に経験させてもらうんです。そういった生徒が、例えばホームステイとか、1年間の留学に行きました時に、それを披露するわけです。そうすると、日本人みんなこんなことできるのかと。みんなできるわけではないんですけども、ある種そういう日本の素晴らしさを、自分の自己肯定感の一つになっていったらいいなというふうには思っているんです。単に芸事だけではなくて、私たちの持っている、そういった調整力であるとか、手先の器用さであるとか、そういったところをいろんなレベルで、早め早めに育成していく、気づかせていくということが重要なのではないかなというふうには思っております。

それから、論点にあった、環境・取組につきましては、私は学校教育をはじめ、今結構な取組がされている。地域社会、地域の NGO、NPO 等々で、結構な取組がされているというふうには思います。もちろん多いに越したことはないわけですけども、そういったところをしっかりと整理しながら、そういったのを一つの地域資源として、東京ならではの地域資源といたしまして、少し整理していくと。私、学校教育が長かったものですか、東京版のカリキュラムみたいな、グローバル人材を作っていく東京版のカリキュラムみたいなものを、提案していくと。今こういった取組がなされていると。そして必要なのはこの部分です。お金がかかるのはこの部分です。だからこれやりますと。そういうパッケージとして、見せていくということが、とてもオーガナイズしていくということが重要なのではないかなというふうには思います。

実は私、明日、地域の小学校に行きまして、ミャンマーの学生を連れてきて、ミャンマーでやっているじゃんけんを、小学生たちに披露することになっているので、それで一緒に遊ぼうということになっています。こういったことって結構なところでなされているんじゃないかなというふうには思います。少し整理して、オーガナイズしていったらいいんじゃないかなというふうには思います。

私からは以上です。

(秋田座長)

荻野委員ありがとうございます。

それでは続きまして、柴山委員お願いいたします。

(柴山委員)

2つの論点ですね。最初の「世界を舞台に活躍する上で求められるグローバルな素養」を考えるについて。今、この21世紀の世界で、グローバル化によって、各国に共通にもたらされた教育課題と言われているのは、一つは高度知識社会に対応した教育と、もう一つは、異なる人々と一緒にやっていける協働する力を

育てる教育です。この2つが日本に限らず、どの国でも今大事な教育のポイントと言われているかと思います。それで、考えました時に、OECD から出されているコンピテンシーとか、あるいは日本人家族を対象にした子供にどうグローバルな力を育てるかという研究の知見を踏まえすと、大事な資質としては3つあるのかなと考えています。

一つは、違った人と一緒にやっていけるような柔軟さとか、異質な集団に馴染んでいける力とか、そういう適応力とか柔軟さ、順応力が必要になると思います。

二つ目は、単に接触するだけでは、何か一緒にやるってことができないので、そのツールがやっぱり必要になると思います。私は、海外で育っている子供の研究をずっとしていますが、ドイツで育っている日本人の子供で、現地校に行っている子は、英語とかフランス語の習得のハードルが低いんですね。やはり言語間の距離というのがあります。日本語ネイティブ子にとっては、違った言語体系を習得するのは難しい。逆にドイツ語ネイティブの日系の子が日本語を習得するのに苦労してるんですね。漢字を習得するのに苦労している。

そういう状況を見ますと、やっぱりこのコミュニケーションのツールというのは大切であると思います。より深い活動をするのであれば、言語なしには私たち人間はより深いレベルの活動とか思考ができないので、やはり必要になると思います。

海外の子供たちを見ていると、マイノリティーとして育っている日本の子供ですが、言語も継承語である日本語の方が弱く、現地語が優勢です。日本語環境ではない中で日本語を育てている、そういう子供たちをずっと長く追っていると、大事なことは幼少期から日本語にたくさん触れることだと感じます。触れ方も多様な日本語の言葉を聞く、お話を聞く、読み聞かせを聞く。そして日本語話者とたくさん接触する。日本語話者も同年齢の子供から大人まで、幅広い年代のいろいろな日本語を聞くことが大事です。たくさん聞いてたくさん触れるっていうことが、やっぱり大きくなった時に、話し言葉の土台になっていると感じます。

共通のツールを身につけることが必要かなと思います。

3つ目は、そういう異なる人と一緒にやっていく中で、自分というものを持てるようになることも大事なかなと考えます。自分の強みとか自分の良さ、それが日本人の良さに重なる部分もあるかもしれませんし、個性もあるかもしれません。自分はこれでやっていけるし、これがうまくできる、そういう自分というものを見つけて、自立的に活動できるような力も必要なのではないかなと思います。以上が3点です。

もう一つは、「グローバルな素養を育む上で必要な課題と取組」ですが、日本人の20代の若者を対象にした調査によりますと、大学で留学を志向するのは、その前に様々な異文化の間を移動した経験があるほうが、留学志向が高いという報告もあります。

異文化間の移動には、短期の留学や海外研修、私的なホームステイなどがあります。こうした物理的な移動というのは、すごくインパクトが強いですね。単に言語だけじゃなくてインパクトが強い。ただ、それが叶わない場合には、国内で多様な外国人と接した人は、大学生になった時の留学につながりやすい。そういう結果もあります。それを見ますと、やはり幼少期から異なる空間に移動できるのであれば、それはとてもいいですね。

例えば海外に何日間か滞在するようなプラン、プログラムがあればいいと思います。ただ、年代によっては、幼児とか小学生の場合には、なかなかそういうことも難しい側面もあると思いますので、日本に住んでいる子供たちも、それに似たような疑似的な体験ができるというような環境があるといいかなと思います。自分とは違った言葉、違ったもの、違った人という、そういう意味での異文化に移動できるような、移動を促進するような環境があるといいのではないかなと思います。

幼児でも自分と違った人には、2歳、3歳ぐらいから気づきます。カテゴリーは持っていなくても違いに気づくという、幼児もそういう能力を持っています。違いに気づいた上で、違うねっていうだけで終わるのではなく、ここは同じだよって共有する部分とか、あるいはこのことを一緒にやったよね、一緒にできるねってというような共通の経験を積んでいけるような、そういう取組を何か提案できるといいのではないかなと考えました。

以上です。

(秋田座長)

柴山委員ありがとうございます。皆様、どうもありがとうございます。

こちらについては、本日ご欠席の林委員より事前にコメントを頂戴いたしておりますので、私の方で代読をさせていただきます。

国際資本市場協会理事の林礼子でございます。この度は本アドバイザーボードの委員として参加する機会を賜り、誠にありがとうございます。1987年に大学院を修了してから約40年間、外資系金融機関あるいは国際資本市場協会という600団体を超える金融機関、政府系の機関で構成される団体で勤務をする中で、我が国の関係者の存在感が必ずしも高くないということを感じてきました。

一方、少子高齢化が加速する我が国において、海外の方々との交流の必要性はますます増えるもの、増すものと認識しております。このような中で、我が国の次世代が海外の人々と円滑に交流し、存在感、プレゼンスを高め、ルールメイキングも含めてリーダーとして活躍していくことを推進することは意義があることと考え、本アドバイザーボードの目指す子供たちが将来世界を舞台に活躍する未来を描けるよう、早くから多文化に親しみ、豊かな国際感覚を育む機会を創出するという考え方に強く賛同いたします。

本日の論点1ですが、個人的にはこれまでお会いする機会のあった世界で活躍する方々の素養として、1.自らの考えをしっかりと持っている。2.その考えを伝える能力がある。必要最小限の語学力、ロジカルに話す。そして3.相手の立場を理解しようとする意欲と能力があるということかと思えます。

その上で、そのような素材を育むという論点2のためには、この3つのポイントに答えるために、それぞれ1については読書、議論などを考える能力の向上、2については英語学習、自らの考えを発表する訓練が必要であります。3については、読書、議論などを考える能力の向上とともに、ボランティア活動を通じて高齢者あるいは障害者、外国にルーツを持つ方々などの支援をすることで育めるのではないかと思料します。なお、幼児の段階では、保育所、幼稚園等において積極的なコミュニケーションの訓練と個性を伸ばす機会を持つことが必要であり、保護者から理解を得ることが必要と考えます。

というふうに、林委員からはあらかじめご意見を頂戴しております。

皆様、いろいろありがとうございます。

それでは、プレゼンターの林様にも、ご発言をお願いしたいと思います。林様、お待たせいたしました。お願いいたします。

(林プレゼンター)

いや、これだけ立派な皆様から立派なご意見が出ているので、私の意見はあまりないんですけども、残ったところはないんですけども、やっぱり当人のモチベーションって非常に重要だと思ってまして。

何かをやりたいとか、これを達成したいとかっていう、そういう気持ちって、結構今若い人を見てみると、なかなかそういう人おりません。何をすればそういうふうになるのかということか、まだ答えはわからないですけども、今、恵まれてるっていうのもあって、なかなかそういうことが出てこないのかもしれないですけども、やりたいとかいうパッションって結構大事で、それを思った時に、そのやりたいこととか達成したいことのある意味、世界基準、世界水準で見るとはやっぱり大事で、何かの1番になりたいってなった時に、日本チャンピオンじゃなくて世界チャンピオンである。そういうような世界水準で見るとは大事。いろんな分野があると思うんですけども、当然その文化でも海外の文化もあれば日本の文化もありますので、そういう常に世界で起こっていることを身近に感じて、それを自分の中に取り入れていくっていうのは大事な素養なのかなというふうに思いました。

もう一つは、先ほど柴山先生も言われてましたけども、やっぱりその多様性というか、いろいろ区別をしないと。基本的にはやっぱり最終的には同じ人間だということをちゃんと理解するっていうのは大事で、もちろん容姿とかいろんな文化、バックグラウンドは違うんですけども、最終的にはやっぱり感情というものがあって、気に入らないことがあれば怒るし、一緒に何かやって何か達成すれば楽しいっていう、そういう同じ人間ということ強く感じられるっていうのも大事なかなというふうに思いました。

最後、ちょっとこれもあまり関係ないかもしれないですけど、日本人、なんでこのロジックが弱いんだろうというふうには実は考えてまして。これは私が言うことかどうかはわかりませんが、教育というか、日本人って、その早く正確な答えを見つけるのがある意味偉いというか、そこにエネルギーを費やし、一方で、じゃ良い問いを作る、良い疑問を作るっていうのはかなり弱いんですね。自然科学でもそうして、ある問題ぱっと出した時にさっと解くんですけど、じゃあもっともっという問題を作ってみようっていう、疑問を作ってみよう、テーマを作ってみようってなると、途端にドギマギしちゃうんですね。ですので、多分その教育の仕方としても、良い問いを作るというのが、良い答えを見つけるよりは、良い問いを見つける方がよっぽど難しいってことを、僕の尊敬する人がよく言ってたんですけども。そういうアプローチの仕方というか、そういう、教育の仕方は結構大事なかなと思いました。

(秋田座長)

林先生、どうもありがとうございます。やっぱりこれをやり遂げたいとか、自分はこれが得意だ、好きだ、だからなんとかしていきたいと。挑戦するような精神をいかに育てていくのか。問題解決力の速さより探究力というところかなと思います。

私も一言発言を申し上げたいと思います。先ほど荻野委員からもありました。やっぱり人権意識というか、人として同じであるということが非常に重要でございます。そして多様性を包摂していくというところで、世界を舞台に活躍するという、これからそういう子供たちを育てていきたいという時に、語学はもちろん大事

なツールでありますけれども、まずは多様な文化や言語があって、様々な人がいて、当然とか、それが受け入れられるという感覚を培っていくということが極めて重要であろうと思います。

私は子供が保育園に行っていた時に、例えばフランス人のお子さんが来ると、園では受け入れてくれるんですけど、保護者同士だとなぜか皆さん、ちょっと避けるんですね。我が家ではウェルカムと一緒に付き合っていくと、子供がフランスパンをフランスの人とうちでは食べ方が違うとか、いろんなことに気づきながら、小さな生活の中から違う文化と出会うと面白いんだって、いろんなことに気づくような経験もしてきました。そうした感覚っていうんでしょうか。今はオンラインもありまして、私は保育園でアメリカとつながったら、お弁当っていうものが日本ではあるけれども、アメリカでのランチボックスとはまた違うんだとか、一緒になって食べるんだけど、いろんな違いを子供が気づきながらも、一緒に食べることの楽しさとか、相手を思いやれる、つながる人がいるっていう感覚はとても大事だなと思ったところです。

こうした感覚を育むために、国際都市東京という特徴を特に生かしまして、先入観なく、いろんなところから子供たちの身近なところから、足元からというお話がございましたけれども、受け入れやすい幼児期とか小中学生といった早期から、既にもう東京都ではいろいろ中高生にもやっているわけですけど、より早期から体験的、経験的に多文化に触れる環境を整えて取り組みをしていくことが大事であろうと思います。

また、グローバルな素養と聞くと、すぐ海外に目を向けがちですけども、日本と世界の両方を知ることが、将来世界を舞台に活躍する上で強みになってくるという、今日のまさに林先生のプレゼンテーションから私たちが学ぶことができるところを、子供たちにも経験させてあげたいと思います。

都はこれまでも従来の延長線上にはない、新たな施策にチャレンジをされてきました。「一步先行く東京都」と、私は国の仕事もさせていただいているんですが、いつもこのように呼んでおります。

この政策テーマに東京が一步を踏み出したことにはとても大きな意義があると思います。

これが東京都だけではなくて、全国日本の様々な地域に普及していくということでもあると思います。

都におかれましては、多くの子供が東京の特徴を生かした機会が得られるような、点ではなくて、面的な広がりをどうやって施策として作っていくのかをお考えをいただけたらと思うところでございます。

それでは、意見交換はここで終了とさせていただきます。

最後に事務局から連絡をお願いいたします。

(山本企画調整部長)

はい。次回の開催につきましては、現在3月を予定しております。詳細につきましては、後日改めてご連絡をさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。事務局からの報告事項は以上でございます。

(秋田座長)

本日は長時間にわたりまして、お疲れ様でございました。以上をもちまして会議を終了したいと思います。

林様には本当に貴重なワクワクするこれからのご研究の発展も楽しみにしたいと思います。ありがとうございました。委員の皆様も第1回ということでございましたが、また次回以降もよろしくお願い申し上げます。

本日はありがとうございました。

※テキスト版については、読みやすさを考慮し、重複した言葉づかい、明らかな言い直しなどの整理や補足説明をしています。